

横田、サムライサージで適応力、機動力を示す *Yokota showcases adaptability and mission capability with Samurai Surge*

May 26, 2020

By Staff Sgt. Juan A. Torres
374th Airlift Wing Public Affairs

5月21日、横田基地の第36空輸中隊、第459空輸中隊、および第21特殊運用中隊は、17機の航空機を使用した「サムライ・サージ」演習を実施した。

同演習には、エレファント・ウォークとC-130編隊飛行を行う17機の航空機が参加した。その17機には、2機の第353特殊運用群のCV-22オスプレイも含まれた。この演習を通じ、COVID-19のパンデミックに直面している中でも、インド太平洋地域の安定を維持するために横田の管轄地域で災害救援や有事に対応できる、第374空輸航空団の任務能力、適応力、即応力を示した。

演習当日の朝の悪天候により、乗員の安全と首都圏地域の住民の安全を考慮し、予定していた大規模なC-130J編隊飛行は規模を縮小して行われ、低コスト低高度物量投下の演習部分も中止された。

「エレファント・ウォークは、我々の乗員だけでなく、整備チームや飛行場運用チームにとっても重要なテストの機会だ。この演習では、大規模な編隊から複数の航空機を機動して物量投下を行う能力を展示する。それを実践するための一連の運用は、整備チームが膨大な労力を注いで航空機の準備を整え、任務を可能にすることから始まる」と第36航空中隊C-130Jパイロット兼スケジューラーのメリンダ・マーロー大尉は述べた。

普段よりも遥かに大きな規模の編隊に、計9機のC-130J、2機のCV-22、3機のC-12ヒューロン、3機のUH-1Nイロコイが演習に参加した。

「エレファント・ウォークは、圧巻だ。任務を実践し、大きな編隊を組む力や機動力を目の当たりにできることは、この仕事に携わる者として最高の思いだ。これは、あらゆる部隊が団結し、必要時に任務を遂行する準備を整え、航空兵力を発揮できる証だ」と第374航空機整備中隊C-130J製造監督官デイビッド・アーノルド曹長は加えた。

今年の演習は、COVID-19パンデミックによる数々の制約がある中で実施された。この状況下で確立されたガイドラインと方針に従い、感染を防ぐため、空兵は今回の編隊をどのように計画・作成し、実行するか、改めて考え直すことを余儀なくされた。

「COVID-19は、我々の任務計画の進め方を大きく変えたものの、実行段階ではさほど影響しなかった。あえて違いを述べるなら、持っていないが普段あまり使用していなかったツールや資材の一部を使用する練習ができたことだ。人との物理的距離を維持しなくてはならないことは異例ではあるものの、管轄区域内で起こることに対応するために実際のミッションを計画する時の距離は、常に直面しうる現実的なハードルだ」とマーロー大尉は述べた。

さらに、「我々は別の場所でフライトを計画し、詳細を調整をしなくてはならなかったが、結果、今日機動した17機の航空機の編隊はCOVID-19の問題がなかった時と同じように達成できた。機動したC-130Jは、空挺部隊の2つの大隊もしくは最大36万ポンドの貨物を太平洋のどこにでも輸送出来る。我々の輸送能力は、COVID-19の影響を受けない」と、今回の演習を振り返った。

